

中年期夫婦の自己分化度と夫婦関係満足度との関係

前田 春菜¹⁾・徳田 智代²⁾・原口 雅浩²⁾

要 約

本研究は、中年期の夫婦の夫婦関係満足度と自己分化との関連について検討することを目的とした。配偶者および子どもがいる40～60代の夫婦を調査対象とし、35組より有効回答を得た。夫婦関係満足度の高い夫婦は、自己分化度が高い者同士の夫婦であり、特に夫の自己分化度が高いことが最も重要な要因であることが明らかになった。これより、夫婦関係において、夫の対人関係スキルに注目することの重要性が示唆された。さらに、自己分化の下位尺度では、妻の「問題対処能力」の高さが最も重要な要因であることが明らかになった。夫よりも感情優位になるといわれる妻が冷静に状況を観察したり、感情に流されずに行動ができたりすることが夫婦関係にとって重要であることが示唆された。

キーワード：中年期夫婦，自己分化，夫婦関係満足度

中年期において、個人のライフサイクルのレベルでは、身体感覚の変化、時間的展望のせばまりと逆転、生産性における限界感の認識、老いと死の不安といった否定的変化が起こる(岡本, 1985)。さらに、子どもたちは青年期にあたり、アイデンティティをめぐる発達の危機に受験の失敗や失恋などの状況的危機が加わる。このように、核家族では、青年期の発達の危機と中年の親特有の発達の危機が複合しがちであり(中堀, 1992)、大きな危機になりやすいと言える。また、青年期にあたる子どもたちが独立すると、子どもを含んだ家族の関係から夫婦二人の関係になるという大きな家族システムの変化が起こり、夫婦関係の再構築も必要になる(岡堂, 1988; 中釜・野末・布柴・無藤, 2008)。夫婦がライフサイクルにおける大きな変化に耐えるためには、おのおのが自立して、相手のみならず、自分の価値を十分に評価できていること(Satir, 1972)や、子どもが独立する前、あるいは、夫婦が高齢期になる前から、夫と妻が個として対等に向き合い、責任を分かち合える関係を築いていること(杉井, 2009)が重要である。

個人・夫婦・家族のレベルで重要な時期となる中年期の夫婦について、関係性に対する満足度は、夫よりも妻の方が低いことが多くの研究で示されている(柏木・数井・大野, 1996; 菅原・詫摩, 1997; 平山, 2002)。また、夫婦の人格的な尊重が結婚満足度に影響すること(平山, 2002; 宇都宮, 2005)、夫婦ともに、配偶者からの情緒的サポートが夫婦関係満足度には重要であること(末盛, 1999; 伊藤・池田・川浦, 1999; 平山, 2002)についての報告もある。

しかし、藪垣(2009)は、中年期の問題が育児期や高齢期の問題に比べ見えにくいことや、中年期以外の家族ライフサイクル上の夫婦が抱える問題に研究者の関心が向けられてきたという事情から、中年期夫婦を対象とした研究が心理学領域において十分に蓄積されているとは言い難いこと、中年期を対象とした研究は妻のみを対象とした研究が多いため、夫婦としての包括的理解を目指すためには、夫婦や家族のレベルでの研究を蓄積させる必要があることを指摘している。

夫婦という重要な他者との関係性を考えるうえで注目すべき指標の一つに、「自己分化」があげられる。

1) 社会福祉法人ゆうかり学園

2) 久留米大学文学部心理学科

自己分化 (Differentiation of Self) とは、知性と感情のバランスを保ちそれぞれが融合せずに十分機能することができる能力 (個人内機能)、およびその能力を利用して対人関係の距離感の近さを適度に保つ能力 (個人間機能) とされる (Bowen, 1978; 中島, 2010)。中島 (2010) は自己分化について、以下のようにまとめている。個人内機能においては、知性と感情のバランスが重要とされ、機能が低いと自己統制力が高く、冷静な判断ができ、情緒的な安定や不安の低減をもたらすが、機能が低いと感情が優勢になる。個人間機能においては、自律性と親密性のバランスが重要とされ、機能が低いと明確な自己境界を保ちつつ親密な対人関係を育むことができるが、機能が低いと対人距離が過度に密で融合したり、距離をとりすぎて関係を遮断したりすることになる。また、個人内機能は個人間機能を促進する役割を果たす。個人内機能・個人間機能と相互作用する形で培われるのが、自己分化の中核とされるアイ・ポジション (I-Position) であり、明確な自己の感覚や信念を持ち、安易に人や環境に左右されない能力である。自己分化は、家族の中で生まれ、親から子に影響を及ぼすとされていること、家族のような重要他者との対人関係に特に影響することから、家族の健康・発達の指標になり得る。

Kirr & Bowen (1988 藤縄・福山監訳, 2001) が「自己と他者の思考と感情を区別する能力を強化し、この能力を活用して人生を方向づけ、問題を解決できるように学習することが家族心理療法の主たる指導原則である」と述べているように、自己分化の理論は個人・家族の精神的健康の指標として注目されてきたが、1980年代前半まで自己分化度を測定する尺度が存在しなかったため、実証的研究は未だ少ない。

中島 (2010) は、自己分化を測定する尺度である Differentiation of Self Inventory : DSI (Skowron & Friedlander, 1998) について「臨床家や理論家から広く注目されてきた自己分化の理論的背景である Bowen 理論において、人格の機能や対人関係の性質、心理療法の効果における妥当性の実証的な研究・検証がほとんどみられないという顕著なギャップを埋めることを目的として作成され、個人内機能、個人間機能の両側面から測定でき、自己分化を満遍なく把握できる尺度である」と述べている。また、中島 (2010) は、その改訂版である Differentiation of Self Inventory-Revised : DSI-R (Skowron & Schmitt, 2003) の日本語版を作成して、因子分析、信頼性・妥当性の検討を行い、小野寺 (2010) は、DSI-R の因子分析と、

自己分化と関連すると考えられる尺度および原因帰属との関連性を検討し、臨床的意義を示している。このように、DSI-R は現在自己分化度を測定するには最も有用とされる尺度である。

夫婦という関係性に注目が集まったのが近年であることも相まって、夫婦関係の再構築が主要な発達課題となる中年期夫婦における自己分化の実証的研究は未だ少ない。そこで、本研究では、日本語版 DSI-R を用いて中年期夫婦それぞれの自己分化度を測り、夫婦のレベルでの夫婦関係満足度との関連を検討することを目的とする。

方 法

調査協力者および手続き

調査対象は、A 県にある私立大学の学生の両親や教員で、配偶者および子どもがいる 40 ~ 60 代の夫婦 175 組のうち、38 組より質問紙を回収し (回収率は 21.71%)、有効回答数は 35 組であった。夫の平均年齢は 51.91 歳 ($SD = 3.85$)、妻の平均年齢は 50.40 歳 ($SD = 4.15$) であった。

2010 年 9 ~ 10 月に、講義終了後の学生、教員に対し、質問紙が入った小封筒を 2 部入れた大封筒を配布した。配布時には、第一筆者より、「回答内容はすべて統計的に処理され、個人が特定されることはなく、個々の調査内容についてはプライバシーを厳守すること」、「協力が難しい場合はその場において帰ってよい (破棄してよい) こと」、「質問紙の回答において、夫婦の回答の独立性・プライバシーを保持するため、小封筒に両面テープを貼付し、閉封したうえで大封筒に入れて提出すること」について、口頭および文書にて説明を行った。

質問紙構成

フェイスシート：調査協力者の年齢・性別・現在の職業、配偶者の年齢・現在の職業、子どもの人数および年齢について記入を求めた。

夫婦関係満足度：配偶者との関係満足度について、「全然満足していない」から「常に満足している」の 10 件法として評価を求めた。

日本語版 DSI-R (中島, 2010) : Bowen, M. が提唱した自己分化度を測定する自己評価式尺度を、中島 (2010) が日本語版として作成したものである。本研究においては、中島 (2010) で検討された因子である「core ER」の 5 項目、「対人間の巻き込まれ」の 4 項目、「他者懸念」の 5 項目、「問題対処能力」の 5 項目、「両

親との融合」の3項目、「IP」の9項目、「接近拒否」の4項目、「開示不安」の5項目、計40項目を採用し「全くあてはまらない」から「とてもあてはまる」の6件法で回答を求めた。得点が高いほど自己分化度が高いことを表す。

成人用ソーシャルスキル自己評定尺度(相川・藤田, 2005):「関係開始」8項目、「解説」8項目、「主張性」7項目、「感情統制」4項目、「関係維持」4項目、「記号化」4項目の6因子、計35項目で構成されており、「ほとんどあてはまらない」から「かなりあてはまる」の4件法で回答を求めた。

結 果

1. 夫婦関係満足度の算出方法の決定

夫・妻それぞれが感じている夫婦関係満足度の合算値を夫婦一組の夫婦関係満足度として採用するのが妥当であるかを検討するため、SPSS12.0J (SPSS) による主成分分析を行った。その結果、第一主成分での説明率は62.62%、両得点の相関は $r = .79$ であったため、両得点を加算して夫婦の夫婦関係満足度とすることとした。

2. 各尺度の性差

(1) 夫婦関係満足度

夫婦関係満足度の得点の平均値は、夫が8.63 ($SD = 1.44$)、妻が7.77 ($SD = 2.03$) であった。夫と妻の夫婦関係満足度の得点について性差を検討するため、 t 検定を行った。その結果、夫と妻の夫婦関係満足度に有意差が認められ ($t_{(61)} = 2.04, p < .05$)、夫は妻

よりも夫婦の関係性について満足していることが示された。

(2) 自己分化度

夫と妻の日本語版 DSI-R 総合得点、および各下位尺度得点の平均値、標準偏差、および t 検定の結果を表1に示す。

t 検定の結果より、対人間の巻き込まれ、他者懸念、IP、DSI-R 総合得点において有意差が認められ、夫は妻よりも自己分化度が高いことが示された(対人間の巻き込まれ: $t_{(68)} = 4.09, p < .01$; 他者懸念: $t_{(68)} = 3.58, p < .01$; IP: $t_{(68)} = 2.86, p < .01$; DSI-R 総合得点: $t_{(68)} = 3.45, p < .01$)。

(3) 社会的スキル

夫と妻の成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の平均値、標準偏差、および t 検定の結果を表2に示す。

t 検定の結果より、解説において有意差が認められ、妻は夫よりも解説のスキルが高いことが示された ($t_{(68)} = -2.43, p < .05$)。

3. 決定木分析

(1) 夫・妻の日本語版 DSI-R 総合得点の決定木分析

夫婦関係満足度と夫・妻の日本語版 DSI-R の得点による決定木分析の結果を図1に示す。なお、決定木分析には JMP8 (SAS) を用いた。

決定木分析の結果より、①夫の得点が159以上であり、妻の得点が137以上の夫婦、②夫の得点が159より低く147以上であり、妻の得点が137以上の夫婦、③夫の得点が139より低い夫婦、④夫の得点が147以上であり、妻の得点が137より低い夫婦、⑤夫の得点が147よ

表1. 日本語版 DSI-R における性差

尺度	性別	M	SD	t
coreER	夫	19.94	4.24	1.35
	妻	18.60	4.10	
対人間の巻き込まれ	夫	14.86	3.06	4.09 **
	妻	11.54	3.70	
他者懸念	夫	17.51	4.31	3.58 **
	妻	13.97	3.97	
問題対処能力	夫	17.46	3.70	1.13
	妻	16.51	3.23	
両親との融合	夫	10.29	3.43	1.00
	妻	9.54	2.75	
IP	夫	35.26	6.49	2.86 **
	妻	31.14	5.53	
接近拒否	夫	14.63	4.24	1.49
	妻	13.40	2.40	
開示不安	夫	21.43	3.41	0.44
	妻	21.03	4.20	
総合得点	夫	151.37	19.82	3.45 **
	妻	135.74	18.07	

* $p < .05$ ** $p < .01$

表 2. 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度における性差

尺度	性別	M	SD	t
解読	夫	20.77	3.75	-2.43 *
	妻	22.69	2.76	
主張性	夫	17.34	3.09	1.56
	妻	16.29	2.54	
感情統制	夫	9.63	2.17	-0.16
	妻	9.71	2.22	
関係維持	夫	11.49	2.02	-1.35
	妻	12.09	1.69	
記号化	夫	10.40	2.35	-0.63
	妻	10.74	2.16	

* $p < .05$

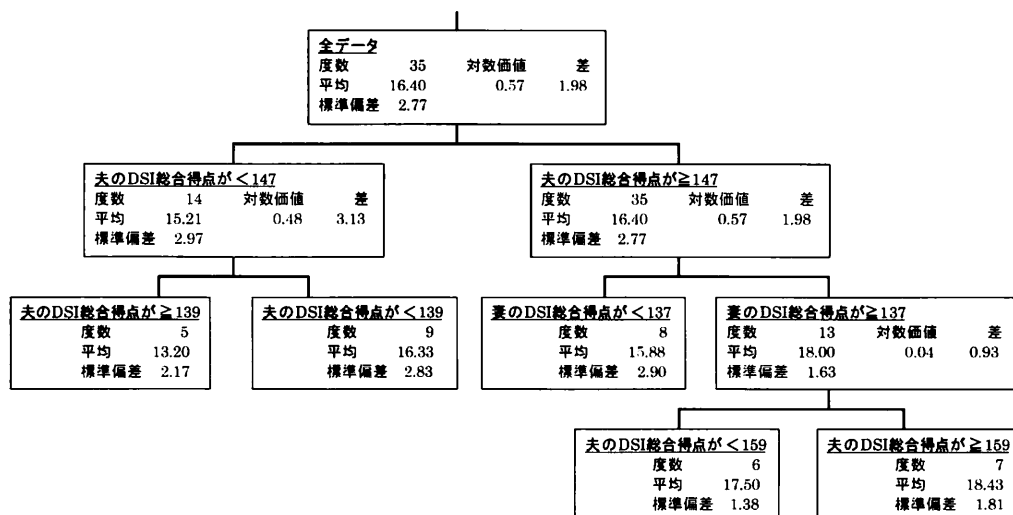


図 1. 夫婦関係満足度と夫・妻の DSI-R 総合得点による決定木分析

り低く139以上である夫婦の順で夫婦関係満足度が高いということが示された。また、 $R^2 = .34$ であった。

まず夫婦関係満足度を大きく左右するのは、夫の得点が147以上であるか否かであることが明らかになった。また、夫の得点が147以上である夫婦の中では妻の得点が137以上であるか否か、妻の得点が137以上である夫婦は、夫の得点が159以上であるか否かが最終的な分岐点となっていることが明らかになった。一方、夫の得点が147より低い夫婦においては、さらに夫の得点が139より低いかが最終的な分岐点となっていることが明らかになった。

(2) 夫・妻の日本語版 DSI-R 各下位尺度による決定木分析

夫婦関係満足度と日本語版 DSI-R の各下位尺度の得点による決定木分析の結果を図 2 に示す。

決定木分析の結果より、①対人巻き込まれの得点が13以上で開示不安の得点が24以上である夫と、問題対処能力の得点が16以上である妻の夫婦、②対人巻き込まれの得点が13以上で開示不安の得点が24より低い夫と、問題対処能力の得点が16以上で他者懸念の得点が15より低い妻の夫婦、③対人巻き込まれの得点が13以上で開示不安の得点が24より低い夫と、問題対処能力の得点が16以上で他者懸念の得点が15以上である妻の夫婦、④対人巻き込まれの得点が13より低い夫と、問題対処能力の得点が16以上である妻の夫婦、⑤問題対処能力の得点が16より低く接近拒否の得点が13以上である妻の夫婦、⑥問題対処能力の得点が16より低く接近拒否の得点が13より低い妻の夫婦の順で夫婦の夫婦関係満足度が高いということが示された。また、 $R^2 = .53$ であった。

まず夫婦の夫婦関係満足度を大きく左右するのは、

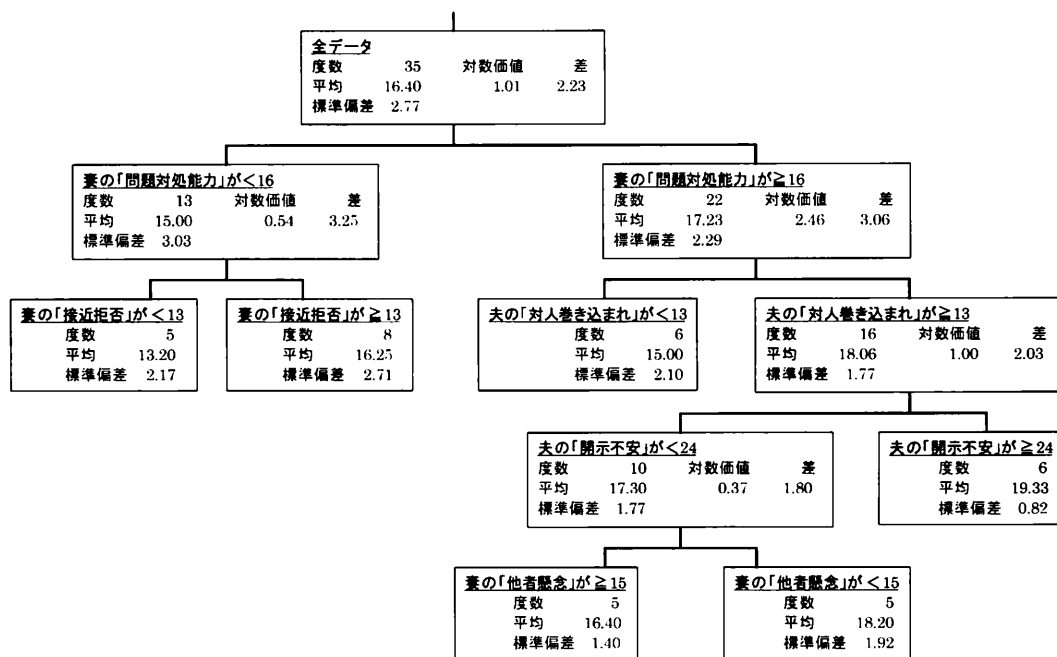


図2. 夫婦関係満足度と夫・妻の DSI-R 各下位尺度による決定木分析

妻の問題対処能力の得点が16以上であるか否かであることが明らかになった。また、妻の問題対処能力の得点が16以上である夫婦の中では夫の対人巻き込まれの得点が13以上であるか否か、夫の対人巻き込まれの得点が13以上である夫婦は夫の開示不安の得点が24以上であるか否かが分岐点となっていることが明らかになった。また、妻の問題対処能力の得点が16以上で夫の対人巻き込まれの得点が13以上および開示不安の得点が24より低い夫婦は、妻の他者懸念の得点が15より低いか否かが最終的な分岐点となっていることが明らかになった。一方、妻の問題対処能力の得点が16より低い夫婦においては、妻の接近拒否の得点が13以上であるか否かが最終的な分岐点となっていることが明らかになった。

考 察

1. 自己分化度と社会的スキルの性差の関連について

本研究においては、自己分化度は夫の方が高かった。下位尺度では、対人間の巻き込まれ、他者懸念、IPは夫が高く、社会的スキルの解釈は妻が高いという結果になった。解釈の項目は、主に他者の表情の読み取りに関する項目である。夫は他者の表情を読み取る力が妻よりも低いというよりは、他者との関係において

左右されない自己を保つ力が高いことの現れであると考えられる。

2. 夫婦の自己分化度と夫婦関係満足度との関連について

夫・妻の日本語版 DSI-R 総合得点による決定木分析の結果より、夫・妻ともに自己分化度の高い同士の組み合わせがもっとも夫婦関係満足度が高くなることが示された。自己分化度が高いということは、個人内の情動と知性のバランスが保たれ、個人間での対人関係能力が高いことである。そのため、葛藤状態が起きることが必至である夫婦関係において、親密性を持ちながらも融合せずに自他の境界を明確にして自律性を保つことができる状態となり、夫婦関係に対する満足度が高いという結果が得られたのではないかと考えられる。自己分化度が高い者同士の夫婦は夫婦関係満足度が高く、自己分化に差異のある夫婦の夫婦関係満足度が低かったことは、同程度の自己分化度の男女が夫婦となった方がその関係性が円滑であることを示唆していると考えられる。Skowron (2000) は、自己分化度と結婚満足度には正の相関があること、つまり自己分化度が高ければ結婚満足度も高いことを示している。本研究の結果は、概ねこの見解と一致している。

また、自己分化度と夫婦関係満足度との関連においては、妻よりも夫の自己分化度の高さの方がより重要であることが示された。藪垣 (2009) が指摘しているように、先行研究においては夫よりも妻の感情やスキルに注目したものが多く、夫側に注目して検証したものは少ない。本研究において、夫の自己分化度が高いことが夫婦関係満足度には最も重要な分岐点となっていることは、注目すべき結果であると言える。

3. 夫婦の自己分化度の下位尺度と夫婦関係満足度との関連について

夫・妻の日本語版 DSI-R 各尺度による決定木分析の結果からは、自己分化の各尺度の中でも特に夫婦関係満足度をもっとも大きく左右するのは妻の問題対処能力であることが示された。問題対処能力の項目は、状況に対して冷静になること、他人に頼りすぎずに対処しようと考えられること、ストレス耐性の強さなどが重視された内容となっている。先行研究において、妻側の夫婦関係満足度の低さの報告 (柏木・数井・大野, 1996; 菅原・詫摩, 1997; 平山, 2002) や、妻側の感情やスキルに注目した研究が多い (藪垣, 2009) といわれるように、妻は夫よりも情緒的反応をしやすいことから、何か問題が起こった時に、妻が冷静に状況を観察したり、感情に流されすぎずに行動ができたことは、夫婦が直面する日常生活のさまざまな場面で、夫婦としても物事に巻き込まれない堅実な判断や対処ができるということであろう。比較的感情が優位になりにくい夫の視点からすれば、妻の問題対処能力の高さは、関係性を維持していくために重要な要素となることが推測される。

夫婦の夫婦関係満足度のうち、妻の問題対処能力の次に重要な分岐点として挙げられたのが夫の対人関係の巻き込まれという要素である。この因子の項目内容は、近い関係の中で起こったやりとり、特に話し合いになったり、「とやかく言われる」など批判めいた発言を投げかけられる場面になったりしたことを情緒的に引きずるかどうかを問う内容になっているため、夫婦の葛藤場面への対処とも類似する内容であると考えられる。夫が対人関係で情緒的に巻き込まれない能力をもっていること、つまり、話し合いをしても気にしすぎず、気分の悪さを引きずらない夫であることが、夫婦関係における満足度にとっては重要となる。

問題対処能力が高い妻と対人関係での情緒的巻き込まれが低い夫という組み合わせのうち、次に重要となるのは夫の開示不安が低いことである。開示不安が低い

と、妻に対して感情を話すことに抵抗感がなく、「分かってもらえる」という信頼感も高いと考えられる。

今後の課題

第一は、調査協力者数と対象者についてである。本研究の結果は、35組の夫婦に限定された結果であるため、今後は調査協力者数を増やして検討していく必要がある。また、今回は、子どもがいる夫婦に対象者を限定したが、子どもがいない中年期夫婦にとっても夫婦関係に対する満足度は重要であるため、対象者を拡大していく必要がある。

第二に、関連を検討する項目についてである。本研究においては、中年期夫婦の再構築に必要な対人関係の円滑さを測る指標として自己分化やその下位尺度に注目し、関連を検討する項目を夫婦一組の夫婦関係満足度に限定して検討を行った。今後は、夫・妻それぞれが感じる夫婦関係満足度と自己分化度との関連を検討することや、関連が予想される項目や分析の方法を増やして検討することが必要であると考えられる。

第三に、自己分化度を測る尺度の検討を重ねていくことが挙げられる。本研究で使用した日本語版 DSI-R は、中島 (2010) によって尺度の妥当性・信頼性、因子の構成などが検討されているが、より適合した因子モデルになるための検討が必要であることも指摘されている。また、作成から間もない尺度であるため、実証的研究として使用された例が未だ少ない。今後実証的研究が積み重ねられることにより、尺度の精度も高まっていくと考えられる。

引用文献

- 相川 充・藤田正美 (2005). 成人用ソーシャルスキル自己評定尺度の構成 東京学芸大学紀要1部門, 56, 87-93.
- Bowen, M. (1978). *Family therapy in clinical practice*. New York: Jason Aronson, Inc.
- 伊藤裕子・池田政子・川浦康至 (1999). 既婚者の疎外感に及ぼす夫婦関係と社会的活動の影響 心理学研究, 70, 17-23
- 平山順子 (2002). 中年期夫婦の情緒的關係：妻から見た情緒的ケアの夫婦間対称性 家族心理学研究, 16, 81-94
- 柏木恵子・数井みゆき・大野祥子 (1996). 結婚・家族観の変動に関する研究 (1) 日本発達心理学会第7回大会発表論文集, 240
- Kirr, M.E. & Bowen, M. (1988). FAMILY EVAL-

- UATION-An Approach Based on Bowen Theory. New York: Norton. (藤縄 昭, 福山和女 (監訳) (2001). 家族評価—ポーエンによる家族探求の旅—金剛出版)
- 中釜洋子・野末武義・布柴靖枝・無藤清子 (2008). 家族心理学—家族システムの発達と臨床的援助 有斐閣ブックス
- 中堀仁四郎 (1992). ミドル・エイジ夫婦の心理的危機 岡堂哲雄 (編) 家族心理学入門 193-206
- 中島隆太郎 (2010). 日本語版 Differentiation of Self Inventory-Revised 作成の試み 東北大学大学院教育学研究科 2009年度課題論文 (未公刊)
- 小野寺哲夫 (2010). 自己分化尺度 (DSI-R) の因子分析と分離—個体化尺度, アタッチメント尺度との関連に関する研究 家族療法研究, 27, 35
- 岡堂哲雄 (1988). 結婚の家族心理学 家族心理学年報 6 金子書房
- 岡本祐子 (1985). 中年期の自我同一性に関する研究 教育心理学研究, 33, 295-306
- Satir, V. (1972). *Peolemaking*. Science and Behavior Books.
- Skowron, E.A. (2000). The Role of Differentiation of Self in Marital Adljustment. *Journal of Counseling Psychology*, 47, 229-237
- Skowron, E.A., & Friedlander, M.L. (1998). The Differentiation of Self Inventory: Deveropment and Initial Validation. *Journal of Counseling Psychorogy*, 45, 235-246
- Skowron, E.A., & Schmitt, T.A. (2003). Assessing Interpersonal Fusion:Reliability and Validity of a New DSI Fusion with Others Subscale. *Jouenal of Marital and Family Therapy*, 29, 209-222
- 末盛 慶 (1999). 夫の家事遂行および情緒的サポートと妻の夫婦関係満足度—妻の性別役割意識による交互作用— 家族社会学, 11, 71-82
- 菅原ますみ・詫摩紀子 (1997). 夫婦間の親密性の評価: 自己記入式夫婦関係尺度について 季刊精神科診断学, 8, 155-166
- 杉井潤子 (2009). 神原文子・杉井潤子・竹田美和 (編) やわらかアカデミズム・〈わかる〉シリーズ よくわかる現代家族 ミネルヴァ書房
- 宇都宮博 (2005). 結婚生活の質が中高年者のアイデンティティに及ぼす影響—夫婦間のズレと相互性に着目して— 家族心理学研究, 19, 47-58
- 藪垣 将 (2009). 中年期夫婦関係研究の展望—システムズ・アプローチの観点から— 東京大学大学院教育学研究科紀要, 49, 307-316

The Relationship between Differentiation of Self and Marital Satisfaction in Middle-Aged Married Couples

HARUNA MAEDA (*Social Welfare Corporation, The Eueahy-Gakuen, Institution for The Handicapped*)

TOMOYO TOKUDA (*Department of Psychology, Faculty of Literature, Kurume University*)

MASAHIRO HARAGUCHI (*Department of Psychology, Faculty of Literature, Kurume University*)

Abstract

This study aims to examine the relationship between marital satisfaction and differentiation of self in middle-aged married couples. The subjects of this study were couples in their 40s to 60s, with spouses and children; 35 valid responses were obtained. Couples with high marital satisfaction were couples where both members had a high level of differentiation of self. Findings indicated that a high differentiation of self in the husband was the most important factor. This suggested the importance of focusing on the husband's interpersonal skills in the marital relationship. Furthermore, on the subscales of differentiation of self, we found that a wife's high "problem-solving ability" was the most important factor. This finding suggests that it is important for wives, who are known to prioritize emotions more than husbands do, to be able to calmly observe circumstances and act without being carried away by their emotions in order to maintain a stable marital relationship.

Key words: middle aged married couple, differentiation of self, marital satisfaction